

# きよろうの 挑戦者 たち

Vol.30



やまもと おさむ  
山本修さん

1960年生まれ。便利堂コロタイプ研究所長。高校卒業後、便利堂に入社。以来42年間、コロタイプ印刷に携わる。撮影、印刷、製版などあらゆる分野を学ぶが専門は刷り。コロタイプの会の設立には当初から関わり、印刷の現場に最も精通する第一人者として、コロタイプ技術の保存と普及に努めている。

墨跡に込められた、  
書き手の息遣いまで  
再現できたら、  
最高ですね。

精巧な再現性を誇る印刷技術「コロタイプ」を守り、  
発信することで文化財の可能性を未来につなぐ。



写真上/サンプルの絵葉書を刷る様子。コロタイプ印刷では、ゼラチン製の版の凹みにインクを塗り込める。拡大すると網点が見える大量印刷とは異なり、濃淡や筆致が原本同様に再現できる。写真下/コロタイプ印刷で複製した魯山人の絵。左が退色した原画で、右が退色前の色をコロタイプ印刷で複製したもの。5枚の版を重ね、色彩の濃淡はインクが多寡で表現した。版を分けて刷る多色刷りのやり方は、浮世絵によく似ている。

数多くの文化財がひしめく東京都。日本中で、京都の2社のみが手がける印刷技術が、文化財の複製で活躍している。すなわち約165年前に発明されたコロタイプ印刷で、精巧な再現性と耐久性が最大の特徴だ。京都でコロタイプ印刷は寺社仏閣の絵葉書作りで発展した経緯がある。近年、一般向けの印刷物はコスト重視の大量印刷技術が主流になった。しかし美術品の複製では、手間をかけた、本物と見違えるほど精巧なコロタイプ印刷が重用されている。

この技術を発信するため、2003年、「コロタイプ技術の保存と印刷文化を考える会(以下、コロタイプの会)」が設立された。事務局を務める山本修さんが所属する便利堂は、日本で唯一のコロタイプのカラー印刷技術をもつ。実は、文化財の復元でもコロタイプ印刷は活躍する。戦後、法隆

寺金堂壁画が火事で損傷する衝撃的な事件があった。しかし、あらかじめ原寸大に撮影してあった記録写真を元に、1967年、壁画の精巧な復元が実現。「コロタイプ印刷でなければ、国宝の価値を伝えることは難しいでしょう」と山本さん。

厳重に保管された文化財が陽の目を見るのは数十年に1度のことも。気軽に閲覧できない文化財だが、紙裏から透ける文字までもの精緻な再現があれば、研究者による発見の可能性が広がる。

「実物そのものの複製があれば、どんな研究のアプローチでも対応できる。脆く失われやすい原本と、多くの人が等しく文化芸術に触れる機会を両立していくには、精密な複製が不可欠なのです」。

コロタイプの会は、文化財を未来へつなぐ挑戦を続けていく。



気持ち新たに  
タイトル変更!

「縁の下の力もち」から  
「きよろうの挑戦者たち」へ

三洋化成は、化学業界の枠を越えてよりよい未来づくりに挑戦しています。三洋化成と同様に、京都を起点に、京都・日本・世界の伝統・文化・産業を支え、さまざまなシーンで活躍する挑戦者たちを紹介・応援します。

三洋化成工業株式会社

●京都市東山区一橋野本町11-1  
もよりバス停は「泉涌寺道」

三洋化成 Twitter  
@sanyochemical